

光によつて どんな未来が見えるのか。

包括支援センター職員と楽しそうに会話するしんさん。一人暮らしだが多くの人に見守られ、笑顔で毎日を送っている。「町のみんなが笑顔で毎日を送れるように」。光ファイバ網の整備によって導入される告知放送端末機の各世帯設置には、そんな願いが込められている。

たがいなくなったら、どうしたら良いか分からないもの」と言われ、せつない思いをしたことがあります。孤独を感じながら生活している人も本当に多いんです。これから必要なのは、住民同士の今以上の自助と共助。傾聴ボランティアをやってもいいという人がこの町には大勢います。そういった人たちが協力して、もっと密度の濃い見守り体制を築いていけたらと思っっています」と話していた。

本事業で導入される「告知放送端末機」は、見守りや健康相談に活用できる。テレビ電話を通して、単に「本人がいる・いない」だけでなく、その人が元気か、健康面に悩みを抱えていないかなど、表情や会話から察することができると。

傾聴ボランティア組織の育成と平行して、告知放送端末機の周知や理解が進んでいけば、将来的には「端末機を活用した、すみずみまで目が行き届く見守り体制」が築いていけるかもしれない。その可能性は十分にありそうだと。

しかし現時点では、大きな不安を抱えていることも否めない。「将来にわたって運営していけるのか」「16億円はほかに回すべき」「一刻も早く実現してほしい」……。さまざまな意見が町に渦巻いている。どれも真剣に、町の今を、そしてこれからを、見つめたゆえの叫び声に聞こえた。

「具体的に、光ファイバ網とはどんなものか、将来的にどんな活用方法があるのか。その説明が足りていないと痛感しています。今後は、活用法の検討と併せていきいきクラブや学校保護者会など、希望団体への説明会も開き、理解を進めていきたいと考えています」と企画課山田貴之広報情報室長は話した。

町は、光の必要性や将来への展望を投げかけた。あなたはそれを、どのように受け止めるだろうか。本事業の費用対効果。それを見定めるのは、これを読んでいるわたしたち一人一人にほかならない。

終

「費用対効果」という言葉がある。投資した費用に対し、どれだけ効果を上げられるかをいう。1万円支出して10万円の利益を得た場合と、5万円の利益を得た場合とでは、10万円の利益を得た方が「効果が高い」ということになる。

本事業の費用対効果はどうだろうか。最大16億円という事業費。張り巡らされる光ファイバ、各世帯に設置される告知放送端末、高速インターネット環境の構築……。この事業によつて都市部との情報格差は一気に解消され、町内の情報基盤は格段に進歩するのは間違いない。ISDN回線に嘆いていた人々も、充実したネット環境を手にできる。利用者が増していけば「費用」に対する「効果」も高まっていくだろう。

今夏、戸籍簿上は存在しているのに本人の所在が分からない、いわゆる「消えた高齢者」の問題が各メディアで報道され、大きな波紋を呼んだ。書類上の情

報だけに頼るのではなく、実際に一人一人の顔を見る、声を聞くといった行為がどれほど大切なことを痛感させられる出来事だった。

今回取材した中田しんさんは、つい先日92歳になつたばかり。徳山で一人暮らしをしている。

しかし包括支援センター職員やヘルパーさん、町外に住む息子さん、娘さん、近所の友達など、自宅にはしょっちゅう誰かがいる。気の置けない人たちに見守られ、しんさんはとつても幸せそうだ。

「いただきものをすると、ああ、これを保健師さんに食べさせたいなあって思うんですよ。で、一緒に食べて『おいしい』って言うってくれと、わたしもうれしくなるの」。そんなしんさんの笑顔が、いつまでも心に残った。

当然のことながら、しんさんのような日常を送っているお年寄りばかりではない。ある保健師は「訪問先のお年寄りから『わたしより先に逝かないでね。あな